特集

『森の交流館・十勝』の10年 ～地域に支えられて～

はじめに

帯広市内の南、帯広の森公園の一角、四季折々に移り変わる周囲の木立に映えてアメリカ松の色合いもユニークな「森の交流館・十勝」が建っています。「森の交流館・十勝」は、十勝、帯広における国際親善及び国際協力の推進をはかることを目的とし、平成8年に建設され、今年10周年を迎えました。

平成8年は、帯広、十勝で研修するJICA研修員受け入れの拠点として同敷地内に国際協力事業団JICA（現、国際協力機構）の北海道国際センター・帯広（現、JICA帯広）が開設された年でもありました。以来、森の交流館・十勝では、○地域住民と、外国人との交流の場を、○外国人に活動の場と、日本に関する情報を、○地域住民に世界の情報を提供する場所として様々な催しに利用され、多くの市民が訪れて研修員や地元在住外国人、留学生などと交流を重ねています。

今回は、歴代館長を勤めた方の中から3人の方にそれぞれの時代の「森の交流館・十勝」について寄稿していただきました。

森の交流館・十勝のスタート

－熱意に燃えた事業の開始－

平成8年4月、研修センターの研修員をはじめ、十勝に来られる外国人と地域に住む人々との交流の場として森の交流館・十勝が開館しました。それまでも帯広市は国際交流に力を入れており、市民団体も協力して、「世界のともだち」、「ワインパーティー」などを行っていましたが、「森の交流館・十勝」ができて本格的に交流を行う所ができました。

交流事業は、茶道をはじめ日本の伝統文化や伝統行事を紹介して、共に参加して行うもの、外国人にその国の行事を紹介してもらい、共に行うものなどで開始しました。

国際協力事業団（当時、以下、JICA）、（社）北方圏センター（以下、NRC）、帯広市の三つの組織が協力しての事業スタートでしたが、いずれの組織も新天地での事業を成功させるとの熱意に燃えて事業開始に取り組んでおりました。よく、夜の10時頃お伺いしても、みなさんいつも仕事をしておられ、いつもこころ良く相談に乗ってくれました。三者に協調の絆が感じられました。

内部の吹き抜け、トロピカルなウィンターガーデン

開館行事の中では、当時の国際協力事業団北海道国際センター帯広の中井所長にJICA事業のお話をしていただきました。笑顔で楽しく話していただきました。集まられた市民の皆様は直に伺う国際協力の話に興味を持って聞き入っておられました。帯広・十勝に国際協力の風が吹き始めたときでした。

初代館長・五嶋情治（現帯広南商業高等学校　事務長）

森の交流館・十勝の成長期

毎年夏に開催する「世界のともだち」

－十勝の人たちの気軽な来館を－

私が「森の交流館・十勝」の館長として平成15年4月から勤務したわけですが、周辺は帯広の森の隣接地であり、とにかく十勝帯広の自然風土の中でも素晴らしいロケーションの中にあり、且つ館内が道内でも珍しい植物園の様相で一年中緑に覆われている「森の交流館・十勝」。そして、近代的な研修施設である「JICA国際センター」（当時）ですが、交通の利便性が悪く、住民にあまり周知されておらず、従って、入館者も減少している状況でした。そこで、多くの十勝住民の方々に周知し、そして気軽に来館していただくためにはどうしたらいいのだろうか私なりに森の交流館・十勝のスタッフやJICA、NRC、JICE（財団法人日本国際協力センター）の皆さんの多大な協力を得ながらいろいろ実践してみました。

まず、メディアの協力を得て広報しようと平成15年10月NHKの生番組「ほくほくテレビ旅中継」を招致し交流館の施設紹介そして「絵本の読み語り」、「ブラジル料理教室」を国際交流員の出演で実況生中継、最後に国際センターのレストランから研修員の食事風景そして料理長によるメニュー紹介などを生中継していただいた結果、直ぐ反響があり訪れる人も増えました。そして2回目に今年の6月30日、同じNHKのローカル番組「まるごと十勝」を交流館から生放送していただき、7月2日に開催される「世界のともだち」（JICA・NRC・JICE・日興美装㈱・留学生による実行委員会）のPRと「JICA国際センター」を含めた施設の紹介、ラテンバンドの生演奏による交流の場面を放映していただきました。結果、7月2日当日は天候にも恵まれ「世界のともだち」が今までより多くの住民の皆さんに参加していただくことができました。帯広畜産大学留学生や在住外国人が出店した15カ国もの屋台（1店舗約200食

「世界のともだち」の日、芝生に集い、憩う市民